

SYMPOSIA

第七部門 (本館2階C203教室)

ポストヒューマンの文学表象

動物・近代・テクノロジー

司会・講師	慶應義塾大学准教授	おお	ぐし	ひさ	よ
		大	串	尚	代
講師	大阪大学准教授	いし	わり	たか	よし
		石	割	隆	喜
講師	お茶の水女子大学教授	たけ	むら	かず	こ
		竹	村	和	子
講師	作家	たか	の	ふみ	お
		高	野	史	緒

「人間」とは近代に発明された概念であり、「知がさらに新しい形象を見つけさえすれば、早晩消え去るもの」——Michel Foucaultが『言葉と物』において宣言してから、半世紀が過ぎようとしているいま、文学という表現形態において、「人間」「自我」「主体」がどのように捉えられてきたのかを再考し、その表象の現在と未来の可能性を探ることが、本シンポジウムの目的である。心性と身体のあるやうの変化、科学とテクノロジー、ヒトと動物、ヒトと物などに関する近年のポストヒューマン研究が射程に入れる要素は多岐にわたるが、本シンポジウムでは、近代とともに誕生した小説というジャンルにおいて表象される人間と、その「人間化」のプロセスからもれてきた「人間以外」との関係性を前景化することになるだろう。

小説の非人間化

あるいはポストヒューマン的読書

石 割 隆 喜

当たり前のことだが、RichardsonやJamesの小説とPynchonの*Against the Day*とでは、読んだ時の印象はまったく異なる。ところでこの「当たり前」のことは、「ポストヒューマン」と呼べるかもしれない問題に関係しはしないだろうか。PamelaであれIsabel Archerであれ、小説には主人公がいて、Benjamin曰く、われわれは皆彼女等(彼等)の「意味ある生」から温もりを得たいがために彼/女等のbiographyを貪り読むのだが、ここでこの主人公の「生」とは、小説研究の教えによれば、「鍵穴」や「窓」から眺められた生である。この視線のあり方が小説＝リアリズムの形式であり、したがって小説的〈人間〉とは、言わば「覗き」を契機として生まれた主体である。ならばパステイシューという、人間を視線の対象とすることには無関係かつ無関心であるように見える形式を使いこなして書かれたPynchonの作品において、〈人間〉の行方は？

雪のごとくつめたき人

チャイルドの短篇にみる子殺し・冷凍睡眠・インセスト

大 串 尚 代

子殺しの疑いで有罪となった女が連れて行かれたのは、監獄ではなくとある科学研究室であった。当時開発されたばかりの冷凍睡眠装置の、彼女は実験台として選ばれたのだった。数十年後に目覚めた女は、あるとき自分の子孫であると思われる男性と出会い、恋に落ちる。19世紀に小説家・ジャーナリスト・奴隷解放運動家として活躍したLydia Maria Childが1846年に

版した短篇“Hilda Silfverling”は、濡れ衣を着せられたヒルダの再生の物語であると同時に、人間らしさや女らしさを規定する社会文化的制度を軽々と飛び越えてしまう内容を持つ。この作品で注目すべきは、生命と非生命、人間と非人間（あるいは人非人）の境界線がゆらぐ点のみならず、彼女が共同体の禁忌に挑戦するきっかけを与えるのが、テクノロジーという点である。カプセルの中で冷たく横たわる女が、生の限界を越えて目覚めることは、なにを意味するのか。本発表では、チャイルド作品における、生殖、死を放逐するテクノロジー、セクシュアリティの変容を通して、「人間」という装置の枠組みを再考したい。

「非人間」と「ポストヒューマン」

人の「心」はどこへ行く

竹村和子

言語的動物である人が、それゆえに有する過剰さと折り合いをつけるために創成した概念が「神」——人知を超えた摂理——とすれば、諸事万事を人知によって統御しようとする近代は、「人間」の誕生であるとともに、個々人が過剰さの暴力に無媒介に向き合わねばならなくなった時代である。人は自らの「心」を所有すると同時に、自らの心を説明し、防御する必要に迫られた。こうしてみると、近代になって登場人物の心理を詳述する近代小説が誕生したのも宜なることだが、逆に言えば、近代文学は、この「人間化」を一方で推進しつつ、他方でそれが万全でないことを暴き続けているジャンル、つまり「人間化」のただなかに「非人間」の亡霊をつねに呼び込むジャンルである。「人間化」の残余としての「非人間」は、「ポストヒューマン」とどう繋がるのか。あるいは繋がらないのか。近年のポストヒューマンの批評のなかで看過されがちな心的構造の次元で考えるには、文学表象、とくに文学理論の検証が不可欠だ。発表では、おもにEdgar Allan Poeとその批評、および日本を含めた受容の歴史のなかで考える。

「過ぎ去ろうとしない近代」か、無意識の未来化か？

高野史緒

小説を書く者たちは、文学論や「文学上の流行のテーマ」をどれだけ意識して執筆しているのだろうか。自分以外の者のテキストを解析する評論家や文学者を兼ねている作家ならば、あるいは、他の文学者の論を取り入れて小説を書くこともあるかもしれない。フーコーが「知が新しい形象を云々」と言ったなら、肯定にしる否定にしる、それを計算に入れた上での小説を書くかもしれない。が、ほとんどの作家はそのような執筆動機を持たないだろう。16世紀にラブレーが無神論を含んだ文学を書き始めた頃と現在の作家たちの意識は、それほど大きく変わらないのではないか。しかし、作品は書き手の無意識的なものを文章としてさらけ出す行為であると考えるなら、文学論上の潮流を意識しないで書かれた作品も、無意識的に時代の変化を受けているのではないだろうか。文学研究はテキストの解析を通して人間の意識が向かう方向性を探るといふ存在意義もあるだろう。

第八部門 (本館2階C202教室)

20世紀後期アメリカ詩の世界観の生成 ブラックマウンテンから環太平洋へ

司会	獨協大学教授	原	成	吉
講師	日本福祉大学教授	小	泉	純
講師	琉球大学専任講師	井	上	間
講師	広島修道大学准教授	塩	田	弘

20世紀後半のアメリカ詩は、Donald M. Allenが編纂した*The New American Poetry: 1945-1960* (1960) から始まった。ベストセラーとなったこのアンソロジーが、60年代以降のアメリカ詩をマッピングし、視覚化したといえよう。このシンポジウムでは、『新しいアメリカ詩』を代表するふたりの詩人を中心に「20世紀後期アメリカ詩の世界観の生成」を考察する。ひとりにはCharles Olson (1910-70) — オルスン時代の「ブラックマウンテン・カレッジ」とは何であったかを明らかにし、彼が描いていたポストモダンの世界観を検証する。もうひとりにはGary Snyder (b.1930) — アメリカ西海岸と日本を中心とする環太平洋のトボスから生まれたスナイダーの世界観をとりあげ、アメリカ詩の変容を考察する。

はじめに原が、ブラックマウンテンとサンフランシスコを結びつけた詩人Robert Creeley (1926-2005) と*The Black Mountain Review* (1954-57) などのリトル・マガジンが果たした役割について紹介する。

ブラックマウンテン・カレッジの芸術観の何が引き継がれているのか？

小 泉 純 一

Charles OlsonやRobert Creeley, Robert Duncan (1919-1988) などの詩人がブラックマウンテン詩人と呼ばれる理由は、この三人が五十年代にブラックマウンテン・カレッジを拠点として活動した点にある。この大学は1933年に古典語学者のJ. A. Rice (1888-1968) を中心に創立され、ドイツのパウハウスで教えていたJosef Albers (1888-1976) が教鞭をとったことでも知られている。芸術理解を中心にした教育は当時のアメリカでは斬新なものであった。五十年代前後にはRobert Rauschenberg (1925-2008) やJohn Cage (1912-1992) もこの大学を訪れ、オルスンと共にハプニングと呼ばれるイベントを行った。オルスンたちが引き継いだこの大学の芸術観とはどのようなものであったか、またそれがその後、現在のアメリカ詩・芸術の中でどのように引き継がれているのかを明らかにしたい。

『世界像』とオブジェクト

Charles Olson と戦後太平洋

井 上 間 従 文

人間、動物を含むすべての事物が資源として表象される状態こそが近代以降の「世界」である、というハイデガーの「世界像」概念は、東アジアにて日本の植民地支配の遺制を引き継いだアメリカによる「世界のターゲット」化へと直結するとRey Chow (b. 1957) は論ずる。

本発表では第二次大戦直後のチャールズ・オルスンによる詩論と詩作品を精読し、彼がそうした軍事的・言説的構成に強い異議を唱えるのみならず、自らのテキストにおいて、「像」や

「資源」として定立され、破壊された物に内在するエネルギーの形式化を通して、詩人や読者達が「物 (object)」として、模倣なき生成のプロセスに参加する契機を提供していたことを明らかにする。このような読解から輪郭を現すのは、同時代の太平洋を生きる人々やその他のオルスンの読者たちが「物」としての生成変化の中から見出す、事物との平等な社会関係の可能性である。

Gary Snyder, *Mountains and Rivers Without End* の惑星思考

ウォールデン湖から太平洋へ

塩田 弘

「環太平洋をつなぐ詩人」ともいわれる Gary Snyder の詩的想像力の源泉には、禅仏教をはじめとするアジアの文化やネイティブ・アメリカンの世界観等がある。これはカウンター・カルチャーの時流の中で、近代文明のあり方を否定して自然と共存する新しい世界観を創出するものであり、スナイダーの作品は「ポストモダンのもうひとつの方向性を帯びたもの」でもあった。

本発表では、スナイダーが40年にわたってライフワークとして取り組んだ連作長篇詩 *Mountains and Rivers Without End* (1996) の壮大な世界観「惑星思考」について、Henry David Thoreau (1817-62) が *Walden* (1854) にて湖の水が世界を漂う様子を夢想し「心の中のひそやかな海」へ漕ぎ出すよう読者に呼びかけている箇所に応えたものとして位置づける。自身の体験と山水画の世界観を踏まえ、スナイダーは自らを水のように循環する存在と捉え、地球全体をひとつのウォーターシェッド (水の流れ) として視覚化し、「本ではなく生きたパフォーマンス」として世界を描くのであった。

第九部門 (本館2階C201教室)

精読の射程

アメリカ文学名作短編再発見

司会・コメンテーター	立教大学教授	舌津智之
講師	青山学院大学准教授	わかばやし 若林麻希子
講師	鶴見大学特任教授	くにしげ 國重純二
講師	福岡大学准教授	ひわたし 樋渡真理子
講師	京都大学教授	わかしま 若島 正

舌津智之

文学批評における精読という言葉は、ニュー・クリティシズムとの連想が強いため、今日では、テキストの内側で自己完結する反動的な審美主義を想起させる概念かもしれない。なるほど、本シンポジウムは、文学作品を政治や文化の鏡としてのみ捉える批評的流行に与するものではない。けれども、文学研究を現実世界の諸問題から隔離するナイーブな夢想到に淫する企画でもない。いま、文学作品の精読とは、いかにして、個人的体験であると同時に、解釈共同体の現実へと開かれた営為になりうるのだろうか。

本企画はつまり、主題や時代で枠組みを決めず、限られた時間内での議論に適した短編を取り上げて、アプローチの方法論である「精読」を共通項に、その批評的射程を幅広く見据えることを目指す。「名作」の「再発見」とは、キャノン (Hawthorne, Faulkner) の読み直しに加え、比較的新たに評価の進んだ作品 (Chopin) や、知られざるテキスト (Gene Wolfe) の掘り起こしも含意するものである。また、作品論と作家論の有機的關係や、「精読」と文化研究／イデオロギー批評との相互交渉についても考察を広げることになる。

Hawthorne の“Rappaccini’s Daughter” (1844) を読む

國重純二

この短編は、科学万能主義への批判とか、近代合理主義精神の批判がテーマだという従来の考え方に対し、もっと幅の広い解釈の可能性を精読によって探ってみる。たとえば先行する“*Young Goodman Brown*” (1835) の善悪が逆転した世界や、のちの *The Scarlet Letter* (1850) における宗教とロマン主義の葛藤を、Rappaccini 博士の庭と比較対照する読みが、Brown, Giovanni, Dimmesdale の共通点や、Faith, Beatrice, Hester の共通点を明らかにするのではないかと考えている。もしそうなればこれまでの曖昧な男性像、男性を凌駕する力を持つ女性像を産み出した Hawthorne の真意が少しは明らかになるかもしれない。このシンポに参加される皆さんとの討論から、思いがけない“Rappaccini’s Daughter” が浮かび上がってくることを期待している。

Kate Chopin の“Lilacs” (1896) を読む

若林麻希子

“Lilacs”は、従来、ケイト・ショパンの女性セクシュアリティに対する関心の多様性を例証する作品だとされてきた。異性愛空間を象徴するパリと同性愛空間を象徴する修道院を、ライラックの香りに誘われるがままに自由に行き来する主人公 Adrienne Farival の奔放な性の可能性を描きながら、そのような自由な性的表現が修道院からの破門という形で最終的には否定されるというこの作品のプロットに、異性愛の汚染から同性愛を守り、特権化しようとするショパンの同性愛擁護の姿勢を読み取ることが出来るというのがその論点だ。本発表では、“Lilacs”を取り巻く異性愛か同性愛かの二項対立的な問題意識を流動化する読みを展開しつつ、ショパン文学の新たな問題系を指摘することを目指したい。ショパン文学において女性セクシュアリティの問題がどれほど根本的なものであったのか？このような疑問に改めて向き合ってみようと思う。

Faulkner の“A Rose for Emily” を読む

樋渡真理子

本シンポジウムでは、“A Rose for Emily” (1930) を取り上げたい。Faulkner の短編のなかでもおそらく最も読まれていると思われるこのテキストについては、既に優れた先行研究が多く存在している。町の名家の令嬢である Miss Emily の一生に重ね合わせる作中の「語り手」に関する研究、また、錯綜する物語の時系列に関する研究等々、それらはいずれもテキストの精読の上に成立した成果である。「精読の射程」と題された本シンポジウムでは、まずは Faulkner のこのテキストをめぐる多様な「精読の形式」を改めて確認したい。その上で、テキストの内部を志向する求心力に支えられた精読という方法を、テキストの外部を志向する遠心力に支えられた文化研究という方法と対比しながら、改めてこのテキストを精読することの意味を探究してみたい。「精読の射程」の測定結果の一端なりとも報告することが出来ればと思う。

Gene Wolfe の超短篇“Sir Gabriel”を読む

若 島 正

The Book of the New Sun 四部作（1980-82）で知られる、アメリカのSF・ファンタジー作家 Gene Wolfe の短篇集 *Bibliomen: Twenty-Two Characters in Search of a Book*（1984）から、“Sir Gabriel”と題された、長さが約250語しかない超短篇を精読します。わたしはこれまで、勤務先の大学のオープンキャンパスで高校生を相手に、ミニレクチャーと称して、かねてより偏愛しているこの短篇のおもしろさについて講義をしたことが何度かあります。そのときのレクチャーを、ほぼそのままこのシンポジウムで再現してみるつもりです。超短篇を扱うことにより、短篇を精読する一つのシンプルなモデル・ケースを提示すること、さらには、誰にでも共有できる（つまり、高校生にもよくわかる）言葉で、短篇小説を読むときの急所や楽しさについて語ることに、この二つが本発表に設定した課題です。精読が届きうる射程とその限界については、他の講師の方々と議論してみたいと思っています。

第十部門（本館3階C302教室）

認知的視点から見た言語変化と共時的多義

司会・講師	大阪大学准教授	早瀬	尚子
講師	京都大学非常勤講師	進藤	三佳
講師	産業医科大学准教授	大橋	浩
講師	奈良教育大学准教授	米倉	よう子

言語のありかたは時代を超えて変化するものであり、その移り変わる姿への言語学的アプローチも様々である。また、その変化において、構文という特定の意味をもつ記号連鎖が誕生したり、その適用範囲が拡張されたり、話者や聴者を巻き込んだ意味を帯びるようになってくることも、近年の研究の主眼点となっている。

本シンポジウムでは、認知言語学的立場を共通地盤として、通時的に見られる言語表現の意味や用法の変化と、共時的に見られる多義性・多様性とを同時に絡めて考察していく。具体的には、語レベル、句レベル、構文レベルで観察される言語表現の統語・意味機能の拡張・変遷を、構文の成立、および文法化、主観化（主体化）、間主観化といった鍵概念との関わりで見えていくことになる。

状況描写的意味から強調的意味への主観化・文法化

進 藤 三 佳

語彙構造が、ある言語の文脈の中で主体の視点を反映するようになる意味変化の現象は、1990年代から主に名詞・動詞について研究されてきた。それに比して、形容詞の主観的意味変化現象は、近年盛んに行われるようになってきている。形容詞は描写を正確にし、その程度を段階的に表す役割を負うため、話者がどのようにその状況を解釈しているのかを如実に反映する。従って、話者の状況への態度や評価を内包する傾向があり、それが意味変化や文法化を起こし

ていく。われわれ人間がいかに状況を解釈し、その解釈がいかに言語に影響を与えていくのかを探るこのような分析は、意味と統語構造が影響しあいながら変化していく関係を説明することにもつながる。

本発表では、状況を描写するという、本来対象志向の意味を持つ語彙が、どのように話者志向の意味を持ち、そこに統語構造的要因がどのように影響しているのかを探る。

強調詞の発達と（間）主観性

大橋 浩

文化研究の進展にともない近年強調詞の発達に関する論考も散見され、主に強調詞の主要な供給源である副詞や形容詞における意味変化の分析が行われてきた。一方、少数ではあるが前置詞句や名詞句から発達した強調詞も存在し、その意味拡張過程の解明は興味ある課題といえる。

本発表では（1）のような名詞句としての用法に加えて（2）のような強調詞としての用法も持つ *all you want* を取り上げる。

(1) *Is that all you want?*

(2) a. *You're welcome to use it all you want.*

b. *You can inspect it all you want, but it looks perfect to me.*

聞き手に向けた話し手の表出性を表す話者指向的な強調詞としての用法には主観性が含まれる (Traugott 1995)。また、強調詞用法を調査すると、(2a) のような許可や勧誘を表す文よりも (2b) のような譲歩的文脈で用いられる例が圧倒的に多い (Ohashi 2006)。聞き手の発言や行為をいったん受け入れたり、その心理をあらかじめ推定するという譲歩プロセスには間主観性が含まれる (Verhagen 2005)。本発表では *all you want* とその変異形である *all you like* における名詞句から強調詞への発達過程の解明を試み、またその主観性や間主観性について考察する。

懸垂分詞構文の意味とその文法化に伴う（間）主観性

早瀬 尚子

英語での一表現形式である分詞構文の中でも「懸垂分詞」と呼ばれるものは、分詞の意味上の主語と主節の主語とが一致していないことから、首尾一貫性を欠くものと扱われている。しかし一方では同じく主語の不一致が見られる用法が、動詞派生前置詞として固定化した形で存在している (例: *considering*, *regarding*, *including* など)。本発表では、まず共時的観点から、懸垂分詞表現が全体としてそれ独自の「構文の意味」を持っており、主観性を色濃く帯びる認知的事態把握に動機づけられた存在意義があることを示す。また、その表現から出てきたとされる、個々の動詞派生前置詞やその接続的用法への通時的発展、変遷が、大局的に見てこの構文の意味に動機づけられうることを考察する。更に、この構文の意味が、口語で主に見られる、聞き手の注意を操作するメタ的用法の発展にも自然につながることを、Traugott (2003) による主観性、間主観性の概念と絡めて議論する。

受動態の構文機能的多義の確立と文法化

米倉 よう子

現代英語における受動態構文には多様な機能があり、プロトタイプ理論を援用して説明されることが多い。動詞の意味から独立的に構文の意味が存在するという Goldberg (1995) の構文文法では、動詞と構文は別次元に属しているようにみえる。しかし、Langacker (1991) の使用

基盤モデルでは、構文は具体的表現使用の中からボトムアップ式に抽出される。使用基盤モデルでは、動詞と構文は「具体化例とそのスキーマ」という関係にあり、両者の意味に乖離が認められる例こそが、ある構文の発達過程を探るための洞察を与えてくれるといえよう。以上のような展望のもと、本発表では、二重目的語構文の二つの目的語（recipient 項および theme 項）の受動態における主語化の問題を足がかりに、受動態の文文化を考察する。また、受身文に現れる動詞の制約緩和（Terasawa 1997）は、受身文の構文化過程を反映するものであり、recipient 受動（二重目的語構文の recipient 項が主格を与えられ、主語となる受動態）の発生も、その流れの一環として説明する妥当性を示す。

第十一部門（本館3階C301教室）

機能範疇の統語特性と解釈特性を巡って

司会	東北大学教授	かね	こ	よし	あき
講師	東北大学准教授	島		越	郎
講師	名古屋工業大学准教授	みず	の	えい	こ
講師	九州大学教授	西	岡	のぶ	あき

金子 義明

従来、機能範疇を巡る研究は、主として要素の分布特性を中心とした統語的観点による研究が大部分であった。しかし、近年、Rizziを中心としたカートグラフィー（cartography）のアプローチによる研究等を通して、機能範疇がもつ解釈上の役割の解明に注目が集まっている。本シンポジウムでは、TP周辺の機能範疇に関わる言語現象を手がかりとして討論を行う。具体的には、3人の講師の方々に、それぞれ削除現象、副詞表現の認可現象、否定現象をテーマとして論じていただき、それらの現象に関わる機能範疇の統語特性と解釈特性の問題を考えていきたい。

削除現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性

削除現象から考える文の左方周縁部

島 越郎

Rizzi (1997) は、時制情報を担う TP の上位に存在する CP が、文のタイプを示す ForceP、話題句が生じる TopP、焦点句が生じる FocP、定形・非定形の区別を示す FinP という複数の機能範疇に分けられ、これらの範疇が ForceP – TopP – FocP – FinP – TP の階層を構成するという仮説を提案している。

本発表では、この Rizzi の仮説を出発点にして、i) TopP と FocP は談話と直接関連する主節においてのみ生起し、ii) 非定形の FinP は補部位置に時制を持たない TP を選択すると仮定することにより、英語の省略文である空所化と不定詞節における動詞句削除が生起する統語環境に関する新たな分析を提案する。また、分析の帰結として、従属節内で話題化と焦点化が適用して

いるように見える文では、要素が FinP の指定部に移動している可能性を考察する。

副詞表現を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性

水野 江依子

副詞表現については、兼ねてよりその解釈とそれを認可する機能範疇に関わりのあることが指摘されてきた (cf. Travis (1988), Cinque (1999), Ernst (2002), Endo (2010))。副詞が意味的に関連する機能範疇によって認可されることについては大方の賛同を得ているが、機能範疇の「何が」「どのように」認可するのかという点にまで及ぶと研究者の意見は一致しない。

本発表では、認識様態副詞 (*probably*)、主語指向副詞 (*carefully*)、相副詞 (*frequently*) などの TP 領域周辺に出現する副詞をとりあげ、この点について議論することで機能範疇の統語特性と解釈特性を明らかにしたいと考える。具体的には C 統御に基づく副詞の認可システムを提案し、解釈素性が認可に関与していると主張することによって副詞の統語的・意味的振舞いが統一的に説明できることを示す。また機能範疇が構成する CP や TP の内部構造についても言及する。

否定現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性

A 移動の再構築現象を巡って

西岡 宣明

否定文の解釈と統語現象を説明するには節構造内に、否定に関する機能範疇の想定が必要であることが、これまで様々に論じられてきた (Pollock (1989), Laka (1990), Haegeman (1995, 2000), 西岡 (2007, 2010))。また、否定に関する機能範疇と TP 周辺のその他の機能範疇の相対的位置関係に基づき、様々な現象が解明される。

本発表では、A 移動したものを移動の元の位置で解釈する再構築現象に焦点をあて、TP の上位に否定に関する機能範疇 PolP を想定する分析が現象の解明に役立つことを示す。具体的には、A 移動の再構築現象に関する Takahashi and Hulsey (2009) 等のコピー理論に基づく近年の議論を検証し、英語の否定のスコープ解釈と否定極性表現 (NPI) に関わる事実が先行研究において問題となることを指摘する。そして、PolP 分析が、A 移動の再構築に関する新たな提案を可能にすることを論じる。



第十二部門 (本館3階C303教室)

大学における英文読解を見直す

司会	日本女子大学教授	佐藤和哉
講師	近畿大学専任講師	高瀬敦子
講師	福岡県立大学准教授	水野邦太郎
講師	立教大学教授	渡辺信二
講師	学習院大学教授	真野の野やし泰

佐藤和哉

大学における英語教育と言えば訳読を中心とした講読であるという認識が世間一般に根強い。一方、TOEIC対策のような極端な資格志向、リメディアル教育の必要性、総合教材の劇的な増加など、近年の大学英語教育を取り巻く環境は急激に変化している。その変化のなかで、「大学においてなぜ英語を教えるのか」「英語教育の目的は何であるべきなのか」などの根本的な問いには、大学教員間で一般的な合意が得られているとは未だに言い難い。当シンポジウムでは、「多読」「協同学習」「ディベート」「翻訳」など、現在大学で行われつつある英文読解に関するさまざまな取り組みについて、単なる実践報告に留まらず、それらの実践を裏づける理論的背景や英語教育に対する思想を語っていただく。この議論を通じて、大学英語教育の根本的な問いへの答えに少しでも近づくことを目指したい。

モーティベーションを高め読書意欲を引き出す多読授業

高瀬敦子

昨今、入学形態が多様化し、大学生の英語力低下が目立つ。中高英語のインプット不足・文法偏重授業（入試対策）の影響か、英語で内容を読み取ることが出来ない学生が多い。高度な英語の授業に先立ち、まずは英語で読む力をつけるのが先決であろう。読む力を養うには読むのが一番である。その方法として多読授業を行い大量の本を読ませ、読みの流暢さを習得させる。読書への動機付けに必要なことは、(1) 理解可能な英語の本を読ませる、(2) 各自の好みに応じた本を選択させる、(3) 授業中に読書時間を確保する、などである。平易な英語で書かれた本を大量に読むうちに語彙認識の自動化が起り、読書スピードが上がってくる。それを実感すると自信が生まれ、レベルアップをはかり、長い本に挑戦する意欲がわいてくる。読書時間も長くなり読む持久力が養われ、達成感を伴う英語での読書の楽しみを味わうようになっていく。まさに、“Learn to read by reading” (Smith, 1985) なのである。

洋書の読書を通じた学びの共同体創り

水野邦太郎

大学生の多くは、入試に合格するため「読解問題（空欄補充、多肢選択など）」を多く解く。そのような読解問題を解くプロセスは、現実の日常の言語活動として行われることがほとんどない。また、英文はたいてい「著者」も「タイトル」が明記されず、まるで天から降ってくる

かのごとく「読め」とつきつけられる。そのような経験によって英文を読むことが嫌いになり、大学入学後も「単位」取得以外に英語を学ぶことの意味が見えない学生たちに、授業をどのようにデザインすれば“Reading for Pleasure”を経験することができるかが、大学英語教育の大きな課題の一つであると思われる。そうした課題の方策の一つとして、1999年以來、取り組んできた“Interactive Reading Community (IRC)”という学びの共同体創り―洋書の読書を媒介とした①世界づくり②仲間づくり③自分づくりを紹介してみたい。

アメリカ詩をディベートする

渡 辺 信 二

本報告は、教材をアメリカ詩作品とし、運営を日本語によるディベートで20年間行ってきた英米文学科の一授業の紹介です。文学とりわけ詩作品は、その国や民族の文化の精髓なので、これを知らずして、他国や他者を理解することは不可能です。また、ディベートは、よし悪しを別にして、今の世界をリードする米国精神の根幹なので、これを身につけずして、米国理解を果たせず、従って、今の世界状況から考えるなら国際化も果たせない。だが、文学教育は、経済的に無駄に見えるためか、文学の読みはそれぞれ違って良いとして議論を嫌う偏見のためか、また、ディベート教育は、それが牧歌的な上下関係を終わらせるためか、そもそも論争を嫌う日本人の性格の問題なのか、ともに、教育現場の現状ではなかなか受け入れられがたい。果たして、教育は、日本の文化状況を変えうるか。本報告が大学における教育のあり方を探る一つの問題提起となれば幸いである。

「訳読式」の功罪

真 野 泰

「実用」も大事だし「教養」も大事。「多読」も必要だし「精読」も必要。しかし、授業の数は限られている。「読解」とか「講読」とか「リーディング」とか、漠然とした授業を持たされる教師としては中道路線をとるしかないのではないか。わたしは中道右寄りである。使う教科書によるが、たとえば毎回10ページ進むと決め、教室で一文一文訳すことはしない。学生に質問を用意させ、学生が問題にした箇所だけを丁寧に読む。教師の側としては文法や修辭の話をひとつ、ふたつ用意しておく。雑談も少々。どうも嫌われがちな文法や修辭であるが、外国語教育をことばの教育の一環としてとらえるならば、そのへんこそが重要なのだと思う。ことばができるようになることと同じくらい、ことばについて知ることが大事だと思うのである。

英語を学ぶ目的や、目標とする到達レベルは学生によってまちまちである。教師の資質や志向もまちまち。いろいろな授業があってもよい。